お雇い外国人グリフィスが描いた お伽話の中の日本の甲虫たち

保科英人

〒910–8507 福井県福井市文京 3–9–1 福井大学教育地域科学部

Some Japanese beetles in fairy tales written by a foreign chemistry teacher, W. E. Griffs

Hideto HOSHINA

I. グリフィスと明治日本

筆者を含め日本の文化昆虫学の論客たちは，それぞれの著作の中で「日本人の昆虫に対する親近感は欧米人には見られないものである」ことを殊更に強調するてらいがある．大和民族のアイデンティティ発揚の一種とも言えなくもない．もっとも，欧州から来日したエリック・ローラン岐阜経済大学教授は，「子どもを対象とした市場における強力な競争相手，すなわちテレビやパソコン，ゲームがこれだけ普及している日本で昆虫関連産業が成功しているのは，日本文化の中での虫の重要性が証明されているといえる．これは，ヨーロッパ人から見て驚くべきこと」と述べている（ローラン，1999）．つまり，欧州人も日本人の昆虫観が自分たちとは違うと認識しているのはたしかなのである．

ここで少し視点を転じて，来日した外国人が日本の自然に接したのち，彼らが自然そのものや日本人の自然観をどのように消化し，自らの著作に生かしたかを考えてみたい．このような観点で考証の対象となるのは，まずは日本に帰化した英国人の小泉八雲（1850–1904）が挙げられよう．話の本筋から外れるので八雲に関する詳細な履歴の叙述は省略するが，八雲もまた日本人の自然観に感嘆した欧州人の一人である．八雲はチョウ，トンボ，セミ，ホタルなど多くの昆虫関連の作品を残した（枝，2013）．また，岩下均・目白大学教授（国文学）は，八雲が日本人の作った俳句を眺めてみるとカエルの魅力のなさを詠んだ句は 1 つにすぎず，通常の西洋人がカエルを醜いとみなす感情が日本には見られないことに驚いた逸話を紹介している（岩下，2002）．カエルと昆虫の違いはあるものの，ローランと同様に八雲もまた日本人の自然観に異質な点を見出したのである．

本稿では，明治初期に来日したグリフィス（W. E. Griffs）（1843–1928）（図 1）の甲虫を題材とした著作を取り上げたい．まず，グリフィスについて簡単に紹介しておこう．グリフィスはアメリカ人の化学者でいわゆるお雇い外国人の一人である．明治 4 年福井藩に雇用され，藩校・明新館で藩士たちに化学，物理，各種外国語を教え，日本最初の米国式理科実験室を設立した．廃藩置県のあと，明治 5 年大学南校（現在の東京大学理学部や法学部の前身）に移った．教育者として多くの人材を育てたほか，帰国後に日本文化に関する本を多く著した．アメリカ社会に日本を紹介した業績は特筆される．昭和元年に再来日したグリフィスは，その多大な功績に対し日本政府から勲三等旭日章を授けられた．

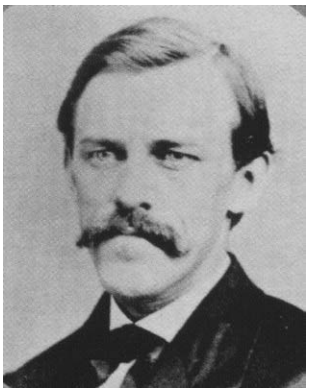

図1．グリフィス．

ちなみにグリフィスが福井に滞在したのは 1 年に満たない．また明治 7 年に帰国しているので，日本にいたのはせいぜい 4 年程度ということになる．しかし，グリフィスが施した化学教育は今なお高く評価されており，滞日期間は短いものの，その功績は頗る高いと言わねばならない．この点で，やはり札幌滞在は 1 年にも満たなかったが，札幌農学校に残した影響力は大きかった クラーク（W. S. Clark）（1826–1886）の事績と相通じるものがある．しかし，グリフィスはクラークのような気の利いた名台詞を残していない上に，内村鑑三や新渡戸稲造といった有名な門下生が輩出していないので（注，誤解している人が多いが，この 2 人は直接クラークの教えを受けたわけではない．ただ，クラークが確立したキリスト教精神に基づくアメリカ式教育を受けている），グリフィスの知

名度はクラークのそれと比べはるかに劣る．

もっとも，著名な弟子が輩出していないというのは世間一般の話であって，我々虫屋の世界となると話はまた違ってくる．実は，グリフィスは一人の偉大な昆虫学者の師にあたる．その学者とは，近代日本昆虫学に大きな足跡を残した福井藩出身の佐々木忠次郎（1857–1938）である．グリフィスの福井時代の弟子の一人であった佐々木は昆虫学および養蚕学に関する多数の著書・論文を発表し，日本の昆虫学黎明期に指導的役割を果たした．佐々木の名が国蝶オオムラサキの属学名（*Sasakia*）になっていることは周知のとおりだ．その佐々木は「旧福井藩士の一人として，先生（＝グリフィス）に対し大なる感謝の意を表するのである」と終生グリフィスを師とあがめていた（佐々木忠次郎先生伝記編纂会 , 1940）．

II. グリフィスが描いたお伽話

グリフィスの人そのものや著作については多くの研究者が論文を発表している．とくにグリフィスの日本関連の著作として最も有名な「The Mikado's Empire（皇國）」（Griffs, 1894）はグリフィス研究の際には必ずといってよいほど引用されるほど研究しつくされており，山下（1984）による訳本も出版されている．しかし，これまでのグリフィス研究は，理科教育学や近代日本化学史の観点から捉えられたものがほとんどで（たとえば，蔵原 , 1994, 1995; 沖 , 1996），グリフィスが日本の昔話や自然を題材としたお伽話（妖精物語）を 3 冊執筆したことは意外に知られていない．たとえば，浅井清がコーネル大学所蔵のグリフィス・コレクションの調査した際の論文（浅井 , 1989）では，グリフィスの経歴やその背景が詳しく述べられているものの，お伽話の類のことは全く触れられていない．また，筆者が勤務する福井大学が発行した報告書内のグリフィスの業績概説でも同様なのである（福井大学グリフィス来福 140 年記念事業編纂委員会 , 2013）．グリフィスのお伽話について考察した研究と言えば, 筆者寡聞にして山下（2006, 2009）ぐらいしか思いつかない．

なぜ，筆者がグリフィスのお伽話に興味を持ったかといえば，グリフィスがいわゆる理科系外国人だからである．日本の伝承や自然をもとに怪談を描いた小泉八雲は，新聞記者や英語教師を勤めた生粋の文系人だった．逆に化学教師のグリフィスによる，日本の風土とそこに生息する動植物を題材としたフィクションは，文化昆虫学的に面白い考証の対象となりうると思う．

山下（2009）によると，グリフィスが描いた日本のお伽話（妖精物語）の 3 冊と，それぞれが収録する物語数は以下のとおりである．

1. 1880 年. Japanese Fairy World: Stories from the Wonder-lore of Japan. 35 編収録.
2. 1908 年. The Fire-fly's Lovers and Other Fairy Tales of Old Japan. 20 編収録.
3. 1923 年. Japanese Fairy Tales. 28 編収録

平成 25 年 11 月 17 日，福井県立図書館で開催された山下英一氏の講演会で配布された資料によれば，3 冊で掲載された物語数の合計は 45 編らしい．35+20+28= 83 より数字が小さいのは，言うまでもなく重複している物語があるからである．なお，この 3 冊のタイトルを CiNii Books で検索すると，日本国内の公的機関での所蔵数が一桁であることがわかる．いずれも稀覯本と表現してもよかろう．グリフィス関連の史料を積極的に収集・保管している福井大学総合図書館でも，所蔵しているのは 1 と 3 のみで全巻は揃っていない．とくに 2 はホタル (Fire fly) がタイトルに直接入っているだけに，閲覧できないのは日本甲虫学会会員の筆者として口惜しいところだ．

これら 45 編全てがグリフィスによる完全オリジナルのお伽話というわけではない．むしろ大半は元々日本古来の民話の英訳である．たとえばグリフィス著作の「The Tongue-cut Sparrow」「Raiko and the Shi Ten Doji」が，それぞれ“舌切り雀”と“源頼光の鬼退治”に該当することはあらためて書くまでもあるまい．

もっとも，山下（2006）によれば，グリフィスの英訳版は，日本の昔話の直訳ではなく，話を論理的により面白くための創意工夫が施されているという．端的にいえば，そこにはグリフィスの主観が存在するのである．お雇い外国人が日本に伝わる昔話をどのように解釈したかという点も筆者としてはおおいに興味をそそられるところだが，それはさておき．ここでは，本学に所蔵されている「Japanese Fairy World 」（Griffis, 1880）と「Japanese Fairy Tales」（Griffis, 1923）に収録された物語のうち，動物，そして主に昆虫が題材となっているグリフィスのオリジナル創作物語の 2 編を取り上げ，文化昆虫学的な考察を加えたいと思う．ちなみにこの 2 編 は「Japanese Fairy World 」「Japanese Fairy Tales」の両者に掲載されている．

III. The fire-fly's lovers （蛍の求婚者）

1）あらすじ

例によって，本ストーリーのタイトルは山下（2006）が与えた「蛍の求婚者」という題名を借用させていただこう．なお，以下の文章中に書いた英単語の大文字, 小文字は全て原文通りの引用である．

越前福井城の濠に咲く蓮の花に，ホタルの王である火王（Hi-ō）が君臨していた．火王には一人娘である蛍姫（Hotaru-himé）がいた．蛍姫は幼少時外出すら許されない箱入り娘だった．やがて成長し眩い光を放つようになると，火王は娘が結婚してもよいと考えるようになった．蛍姫が持つ魅力は，夜間に飛行する全ての虫（night-flying insects）を熱中させた．しかし，肝心の蛍姫の心は動かない．蛍姫は母親である女王に「私は多くの求婚者と会ったが，彼らを夫にしようという気が起きない．これから求婚者たちに私との結婚の条件として無理難題を押し付けるつもりだ．もし，彼らが私を愛するより自分らの命を大事にするのなら，私は彼らとの結婚を望まない」と宣言する．そして，蛍姫はコガネムシ（the golden beetle），黒い羽と体を持つ光る虫（a shining bug with wings and body as black as lamp-smoke），アカトンボ（the scarlet dragon-fly），甲虫（the Beetle），その他多くの求婚者たちに，「私と結婚したければ火を持ってくるように」と要求する．

しかし，誰も帰ってこなかった．求婚者たちは火を取ろうとしてランプに飛び込んだり，ろうそくの炎に焼かれたりして，みな死んでしまった．一方，求婚者の一人であるシデムシ（a carrion beetle）は海原へ泳ぎいって，光を放つ魚の鱗を見つけた．また，クワガタムシ（the stag-beetle）は山に登り，切り株の中に火のように輝く木片を発見した．しかし，山も海も蛍姫の住む濠からは遠すぎ，彼らが取った火は濠に到達する頃には消えてしまった．

結局，同じ福井城の北の濠に住む蛍の王子の火麻呂（Hi-marō）が蛍姫に求婚する．父親の火王も異存なく，2 人の蛍はめでたく結婚する．日本の少女がホタルを捕まえてかごに入れて鑑賞するのは，虫同士の恋の争奪戦を眺めて，火や洪水などの危険を顧みず自分を愛してくれる恋人の存在を夢見るからである．

2）翻訳者泣かせ？の「蛍の求婚者」

日本のホタルは古くから俳句や文学などの題材となってきたが，物語の主人公として登場するホタルの事例は決して多くない．昆虫文化に博学な荒俣氏の著書（荒俣 , 1991）でも，グリフィスが描いた「蛍の求婚者」については触れられていない．

「蛍の求婚者」の結末について，少なからぬ日本人は多少の違和感を抱くはずである．「Japanese Fairy World」に収録された「蛍の求婚者」には，物語が始まる前に，グリフィスが見聞きして得た知見に基づくホタルに関する日本の民俗風習等の紹介がある．そこでは，「日本の人々は 8 月の夕方，団扇を片手に金色に光り輝く光景を楽しむ」とあり，グリフィスはヘイケボタルを念頭に置いて記述したと思われる．ただ，明治の日本の少女たちは雄のホタルに対し「危険をものともせず雌を愛する情熱の持ち主」との思いを本当に抱いて，ホタルをかごで飼っていたのだろうか（図 2）．たしかに日本語には多くのホタルが飛び交う様を「蛍合戦」と呼ぶが，「蛍合戦」とは元々は源平合戦の故事にちなむものだ（高田 , 2011）．我々日本人は知識としては，ホタルは交尾のために集合して発光することを知ってはいるが，「オス同士のメスをめぐる激しい争いに勇気を見出す」といった感傷には浸らない．グリフィスが抱いたホタル観は平均的日本人のそれとはやや違う気がする．

現在の福井市および近隣地域のホタルの産地と言えば，福井市一乗谷や鯖江市河和田が有名であ

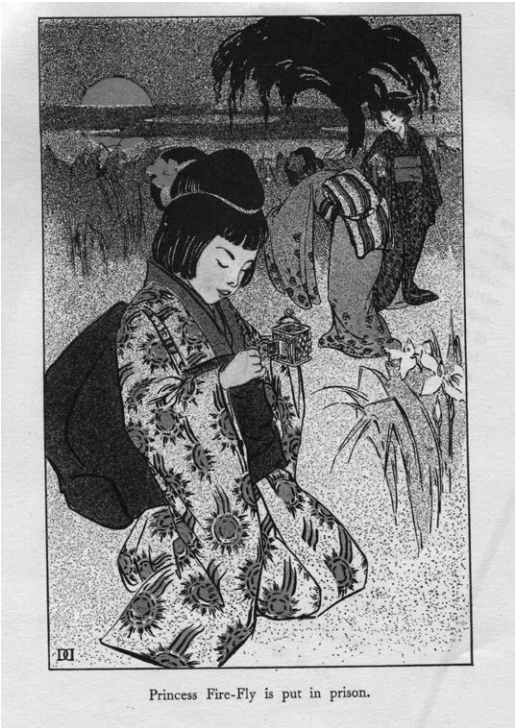

図2. ホタルを飼う日本の少女．Japanese Fairy Tales (Grifiss, 1923) の挿入画.

るが，これらの地元にはホタルにまつわるこれといった伝承はないようだ（河合編 , 1936）.「蛍の求婚者」は福井に伝わる民話ではなく，竹取物語を参考に書かれたものであろう．光り輝く姫君といい，求婚者に対する無理難題の提示といい，最終的には収まるべきところに収まりましたという結末など，ストーリー展開に重複部分が多いのは明らかだ.

筆者が「蛍の求婚者」の翻訳を担当して，絵本を出版するとなった事態を仮定しよう．その場合最も困るのは，作画担当者に対し「黒い羽と体を持つ光る虫（a shining bug with wings and body as black as lamp-smoke）」と「甲虫（the Beetle）」をどう描かせるかである．まず“光る虫”とは一体何を指すのか？　ホタル以外で発光する昆虫と言えば，イボトビムシ，トビムシモドキ，キノコバエ，ホソキノコバエ，コメツキムシなどが挙げられる（池庄司ら , 1986）.“with wings and body as black as lamp-smoke”という長ったらしい修飾語が付いていることからして，グリフィスは漠然とした虫を想定していたのではなく，何らかの確固たる像を脳内に持っていたのではないか．しかし，物語からは，この光る虫がいかなるものなのかが想像できない．原作者の意図に沿うかどうかは別にして，仮に筆者が翻訳を担当するなら，作画者に対して「光る虫はコメツキムシにしてください」と指示するだろう．いうまでもなく，グリフィスになじみ深い新大陸には少なからず発光性のコメツキムシが生息するからだ（Johnson, 2002）．キノコバエではお伽話になるまい．shining bug を“発光する虫”ではなく“光沢がある虫”と解釈すれば，大概の甲虫をあてはめることができるが，ここはキャラクターのバランス上，大勢いる求婚者のうち，1 人ぐらいは発光性種にしたいところだ.

さらに厄介なのが“the Beetle”（甲虫）である．よく考えれば不思議な表現だ．クワガタムシだのホタルだのシデムシだのアカトンボだの具体的な虫の名（正確には科名だが）が羅列されているにもかかわらず，ストーリーの主要キャラクターの一人に対して，いきなり何の説明もなく“甲虫”と来るのである．甲虫とはカブトムシのことではないか，と考えたくなるが，単純にそうとは結論付けられない．というのも，物語中に蛍姫への求婚者の一人として，「stupid gallant, a horn-bug」が登場するからだ．頭が鈍く，猛々しくて角が生えている虫をまさかツノゼミとは解釈できまい．horn-bug とは明らかにカブトムシである．こうなると，グリフィスが描いた“the Beetle（甲虫）”とは何かがわからなくなる．結局，前段のコメツキムシ同様，原作者の意図は無視してでも，翻訳者は作画担当者に“甲虫”に該当するキャラクターとして，カブトムシの絵を描かさざるをえないかもしれない.

グリフィスが種名，科名，目名といった別々の階級に属するタクサ名を同列に扱うのは，何も「蛍の求婚者だけではない」．実はグリフィス童話には「How the jelly-fish lost his shell」（クラゲが甲羅を失くす話）という別の物語があるのだが，この話の中ではコウイカ（cuttle-fish）とイカ（squid）が別々のキャラクターとして登場するのだ．お伽話に分類屋の論理を持ち出すのは大人げないが，このあたりの記述については，化学教師ではあるが生物教師ではないグリフィスの限界と言えるかと思う.

IV. The procession of lord long-legs
（脚長家の大名行列）

1）あらすじ

本タイトルに対し，山下（2006）は「大名，脚長殿の行列」との訳名を与えているが，タイトルに読点が入るのは収まりがよろしくない．そこで今回「脚長家の大名行列」との訳名をひねり出した．どんなものであろうか．脚長家とすれば，清和源氏の名門・足利家とちょうど語呂が合う（もっとも，足利氏は江戸時代以降も支流は存続したものの，大名の地位は保てなかった）.

脚長家は越前国で 4 エーカーの水田を支配する大名である．石高は稲 1 万株．家臣はイナゴが最も多く 6 千人．重臣としてカマキリ（Mantis），カブトムシ（Beetle），クワガタムシ（Pinching-bug）．当主の正妻はキリギリス（Katydid）で，彼女の女中としてテントウムシ（lady-bugs），チョウ（butterflies），ハナムグリ（goldsmiths）が仕えている．当家の使者にはホタル（fire-flies）とトンボ（dragon-flies）が任じられている．また，城の台所方として甲虫の幼虫（grubs），クモ（spiders），ヒキガエル（toads）が奉仕している．さらに，脚長家の領内には数百万の虫たちが住んでいる．脚長家の家臣たちは忠臣揃いで，優れた官僚組織を構成しているが，しばしば“人間”と呼ばれる大きい怪物に捕まってしまうこともある.

ある年の 5 月，脚長家の当主は参勤交代のため，彼が君主と仰ぐ大君（Tycoon）（注，将軍のこと）がおわす江戸に向かわなければならない．大名行列の準備のため，マルハナバチ（Bumble-Bee）は足に付着した花粉を払い落としている．ミツバチ (Honey-Bee) は子どもに足に付いた蜜を吸わせている．行列を先導するのは齢 17 歳に達した老臣のセミ

（Locust）．彼からすれば，他の虫たちは若造どころか赤子のようなものだ．彼は脚長家の家臣たちに「休憩のとき以外は，訪花などで行列から外れるな」と訓示を読み上げる．カゲロウ（？）（Blue-tailed fly）は手や顔をさかんに洗っている．テントウムシは江戸についていくことができず，仲間としばしの別れのため泣いている．コオロギ（crickets）は足が短いためやはり行列に参加できず，陰気に鳴いている．

大名行列は朝6時に出発することになった．時刻掛はノミ（Flea san）である．彼女の家はネコの背中にあり，ネコの瞳の開きで時間を正確に測る．ノミはジャンプしながら伝送役のカ（mosquito）に時間を報告し，さらにその知らせは門番のミズスマシ（Whirligig）に伝えられる．さあ，大名行列の出発である．その様はまことに壮大だ．参勤交代に参加しない家臣たちは，行列を土下座して見送る．アリ（ants）やトカゲ（lizards）らは前足を折ってひれ伏している．もともと平べったいヒキガエルは鼻を泥の中に入れて頭を低くしている．普段は樹上にいる虫たちも地面に降りて来なければならない．行列の提灯持ちはホタル．ゾウムシ（weevils）は朝顔が描かれた傘を持っている．イナゴは槍持ちだ．カブトムシは僧衣を纏い，手を合わせながら歩いている．

沿道では見物人の人だかりができる．ケラ（mole-crickets）が行列のカマキリに野次を浴びせるといったハプニングも起こったが，概して見物人たちは静かに行列を見送っている．行列が過ぎ去ると，町は日常に戻る．

このような大名行列は東海道に入り江戸に到達するまで行進し続けるのだ．道中の衣装，食糧，台所用品などの莫大な支出がある．しかし，大名としての威厳を保つため，大名行列は必要不可欠のものなのである．

さて，「Japanese Fairy World」に収録された「脚長家の大名行列」はここで話が終わるが，「Japanese Fairy Tales」では続きがある．その続きとは・・・・．

沿道で行列を見ていたイモムシ（little Grub）は「私はお殿様を見なかった．どんな人なの？」と母親のチョウに尋ねた．母親は「私もお殿様を見ていない．他の人も同じで，誰もお殿様を知らないはず」と率直に答えた．これらはすべて真実である．沿道からは，お殿様が入っているであろう籠しか見えないのである．

2）オチを欠く「脚長家の大名行列」

「脚長家の大名行列」はグリフィスの日本民話3部作全てに登場する．しかし，筆者が読んだ2冊の間でも，内容が微妙に異なる．「Japanese Fairy Tales」には後日談のようなものが付け加えられていることは1）で述べた通り．このほか，「Japanese Fairy World」では脚長家の時刻掛（タイムキーパー）のノミはメスなのだが，より後年に出版された「Japanese Fairy Tales」では性別がオスに変更されている．藩の組織で公職に就けるのは男だけとグリフィスが思い直したからであろうか．

野暮を承知で虫屋の視点で見たところ，「脚長家の大名行列」もまた突っ込みどころ満載といったところだ．その前に，山下（2006）の記述で一つ気になった点を挙げておこう．山下（2006）は脚長家の重臣はカマキリ，甲虫，バッタであるとし，“Pinching-bug” に「バッタ」という訳語を与えているように思われる．pinching bug はハンディサイズの英和辞書はもちろん，数万円クラスの大辞典でも意味を引くことができない単語だ．しかし，代表的な英英辞典の一つ「The Oxford English Dictionary」には，pinching bug はクワガタムシ（Lucanidae）のことを指すとある．甲虫のとある概説洋書（Preston-Mafham, 2012）でも，クワガタムシの英名として，我々が良く知る stag beetle に次いで pinching bugs との単語が併記されているのである．少なくとも，筆者が目を通したグリフィス童

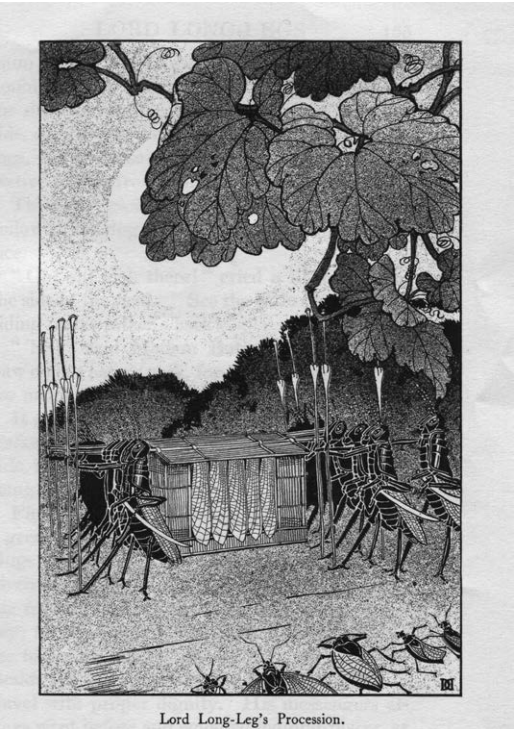

図3．「脚長家の大名行列」の挿入画．Japanese Fairy Tales (Grifiss, 1923) より．

話の版を素直に和訳した場合は，脚長家の 3 番目の重臣はクワガタムシである．

前章の「蛍の求婚者」では，カブトムシを指すと思われる “horn-bug” なる表現が別記されているがゆえに “the Beetle” にいかなる訳を与えるか苦悩したと述べた．一方，この「脚長家の大名行列」ではそのような事情がないので，“the Beetle” は何の抵抗もなくカブトムシとした．困ったのは “Blue-tailed fly” の訳語である．多々辞書類を調べてみたものの，どうしても意味が出てこない．やむなく想像力を働かせて，青みがかって，尻尾が生えている fly ということでカゲロウと訳してみた．いうまでもなく，カゲロウの標準的な英名は mayfly ないしは dayfly だ．tailed fly の正しい訳語を御存じの方がいればご教示願えると幸いである．

役どころとしては，提灯持ちのホタルというのはさもありなんといったところだが，なぜゾウムシが傘持ちなのか，なぜカブトムシが僧侶なのか，また跳躍力に富むはずのコオロギがなぜ脚が短く旅に同行できないのか．この辺りは，虫屋の常識的感性を覆すグリフィスの斬新な発想であると言ってよい．

一方，我々が「脚長家の大名行列」を読んで歯切れが悪いと感じるのは，この話に訓話めいた結末がなければオチもない点である．物語の文章自体は，大名行列の外観の説明に終始しているといってよい．肝心の脚長家の当主はいったい何の虫なのか，そもそも虫なのか？当主は籠にこもったままで（図 3），その正体は結局最後まで明らかにされないのである．

山下（2006）は “The procession of lord long-legs” を読み解き，「グリフィスは大名文化に名残を惜しみつつ，封建制度の存続は明治日本にとって邪魔になったと考えた」と解釈した．説得力のある考察である．グリフィスは日本文化の純粋な紹介とともに幕藩体制を多少揶揄する目的も込めつつ，大名行列を戯画化してみせたのである．こう捉えると，「脚長家の大名行列」を読んだ我々日本人が肩透かしを食らった感覚に襲われることに納得がいく．この物語を読んだ本来の読者である当時の一部のアメリカ人は，「無意味な行列に多大な労力とカネを費やす日本人はなんと無駄なことをしているのだろう」とやや優越感に浸りつつ，清新な（？）カルチャーショックを受けたにちがいない．一方，現代日本人は，史実に即しているかは別にして，時代劇等の知識から得た大名行列を容易にイメージできる．それゆえ，「脚長家の大名行列」を読み終えた我々には，どうしても消化不良的な感触を拭いきれないのだろう．

V. 考察　ーグリフィスの昆虫観をどう捉えるか？ー

1）グリフィスの著作から見る自然物としての昆虫

グリフィスの「The Mikado’s Empire（皇國）」は二部構成である．第一部は，大和時代から明治時代までの日本史の概説で，第二部が日本の風土や民俗の解説である．しかし，第二部に含まれる 18 章のうち，動植物や地形などの自然史に特化した章はない．第 12 章が “The mythical zoology of Japan” となっていて，一見動物学関連のパートに思えるがもちろん違う．ここで主に扱っているのは，章名とおり雷神だとか天狗だとか伝説上の動物である．

グリフィスは日本の動植物に強い関心を寄せなかったのだろうか？　これを知る手がかりが「グリフィス文書」である．グリフィスは日記や書簡など多くの史料を残した．グリフィスの自然観を探るうえで最も重要な一次史料である．筆者が勤務する福井大学の総合図書館には複写からなるグリフィス文書があるが，あまりに膨大すぎ，一から調べることに腰が引けている．とりあえず，ここではグリフィスの福井滞在中の日記（山下，2013）だけを調査対象として，彼がそこで記した昆虫について検証したい．

結論から言うと，福井時代のグリフィスの日記からは，彼の視界に入ったであろう昆虫に関する記述はほとんどない．日本の風物詩であるホタルやセミなどに対してグリフィスが何か抱いたと思われる感傷を，少なくとも日記からはうかがい知ることができないのである．同じく季節を告げるカエルの鳴き声については日記中で何回か触れているものの「気味悪いほどたくさんの小さな蛙がいた」とか「やかましく鳴いていた」など，彼のカエルに対するやや否定的な感情が読み取れる．

日記中でグリフィスが昆虫について繰り返し書いているのは蚊の来襲についてである．彼は蚊によほど悩まされたらしい．現在の福井市では，筆者が夏の夕方に市内を歩いていても，特筆するほど蚊が多いとは感じられない．しかし，福井城近くの福井市順化には，弘法大師が蚊に苦しめられている民家の悩みを解決したという伝承が残っており（杉原編 , 1970），かつてはずいぶんと市内に蚊が発生していたことがうかがえる．

前述のようにグリフィスが物語中で昆虫の目名と科名を並列的に扱ってしまっていること，日記中にあえて昆虫のことを記していないことは，彼の学習歴と無関係ではあるまい．蔵原（2000）にしたがうと，グリフィスが在籍した 1860 年代のラトガース大学のカリキュラムには自然科学系の科目が多くな

く，グリフィスの日記からも彼が大学でいわゆる動物学や昆虫学についてほとんど学んでいないことがわかるからである．グリフィスが最も興味を持ったのは化学であるから当然と言えば当然であるが，彼が生き物に対する学者レベルの観察能力を有していなかったことは否定できないだろう．

かといってグリフィスが，日本に生息していた昆虫に対し関心が薄かったと結論付けるのは早計に過ぎる．たしかに，「皇國」の中で実際の日本の生物に対する記述は多くない．ファウナを構成する種は全く異なるにしても，科レベルとなると新旧北区間には共通する要素が多い．化学教師のグリフィスといえど，叙述対象の中心がアメリカと類似要素を持つ日本の自然史よりも，両国の間で根本的に異なる社会制度に向かうのはやむを得ないことだ．そういった中でも，グリフィスは「皇國」の中で，当時の日本の虫販売人がカブトムシに紙の大八車を引かせて見世物にしている場面をあえて記録している．そして，彼が昆虫を題材とした物語を書いたのは，昆虫になみなみならぬ興味を持っていた何よりの証拠と思われるからである．

２）グリフィスが実際に観察した福井の甲虫とは？

福井でグリフィスの事績が語られる際，福井とグリフィスの繋がりが殊更強調される傾向がある（たとえば，山下 , 2003）．本稿で度々引用した諸論文の著者である山下英一氏は福井県出身で，県内の公立高校で勤務するかたわら，グリフィスに関連する著作を多く発表された．のち，中部大学に移ったあと，長年の研究に対し平成 21 年に福井県文化功労賞を受賞したほどの人物である．ただ，平成 25 年に開催された同氏の講演を聞くかぎり，同氏はグリフィス研究家であると同時にグリフィス信奉者であるとの印象を筆者は持った．つまり，福井在住経験がグリフィスに与えた影響を福井県関係者の山下氏が語る時，何らかのバイアスがかかっている可能性は考慮しなくてはなるまい．郷土史家間の邪馬台国論争を思い浮かべていただきたい．佐賀県在住の郷土史家は「邪馬台国は北九州にあった」と主張するし，一方，近畿の史家は邪馬台国畿内説を唱える場合がほとんどである．

グリフィスは日本行きを決意した際，日英会話書や文典を取り寄せて日本語の勉強をしている（浅井 , 1989）．彼の日本語は「ございます体」だったというが，グリフィスはある程度日本語を解することができた．とはいえ，グリフィスは日本の文学や風土，民俗の知見を独力で得ていたわけではない．たとえば，アメリカ留学経験がある高橋是清（1854–1936）（のち首相）は，東京の開成学校にいたグリフィスが差し出す多くの書籍類を翻訳した．とくに，最も時間を要したのは東海道中膝栗毛だったという（高橋 , 1936）．グリフィスは東京時代に日本人向きの英語教科書を 4 種執筆したが（山下 , 2012），彼が日本関連書籍を本格的に書き始めるのはアメリカへ帰国後である．グリフィスはアメリカへ留学していた日本の留学生たちを親身に世話しつつ，相も変わらず彼らから日本文化に関する知識を旺盛に吸収していた．当然のことながら，グリフィスが様々な日本人から得た知見は，彼らの出身地や出自，個々の自然観や史観と言ったフィルターを挟んでいるのである．

さらに，グリフィスが描いた物語に登場する昆虫には明らかにアメリカ産種が含まれている．「脚長家の大名行列」で 17 歳であることを誇りに思っている老臣のセミとは，明らかに日本にはいない 17 年ゼミである．こうしてみると，II で「蛍の求婚者」に出てくる “a shining bug” を新大陸の発光性コメツキムシにあてはめた筆者の措置は，あながち荒唐無稽ではないと自画自賛したくなる．グリフィスの物語を彩るキャラクターたちは洋の東西にまたがる出身地を持っているのである．

これらの全ての要因を加味しても，グリフィスの物語に登場する昆虫たちのモデルの一部は，明治初期の福井県産昆虫だったに違いない．「蛍の求婚者」「脚長家の大名行列」は明らかに旧福井城および越前松平家をイメージしているからだ．ここで無謀と知りつつ，グリフィスが実際に観察したであろう福井の甲虫について何かしらの推測をしてみたい．

まずはホタルである．現在，福井市の中心市街地周辺でヘイケボタルやゲンジボタルを鑑賞するのは 100 % 無理とはいえないまでも相当困難だ．一方，グリフィスが福井に在住した明治初期には，ホタル類が珍しいものではなかったと想像される．

上記のホタルに関する考察は至極当然のもので面白くも何ともない．つぎに「脚長家の大名行列」で城の門番がミズスマシであることに着目したい．言うでもなく，城の門は濠に隣接した位置にある．かつては福井城の濠にミズスマシが普通に見られたのではなかろうか．

今となっては，明治初期の福井市周辺の水生甲虫相を正確に調べようもないが，当時の甲虫相の一端をうかがえる参考資料がある．戦前に出版されたハンドブックタイプの福井県産昆虫の個人出版物（井崎編 , 1932）もその一つだが，より重要なのは昭和 8 年秋に福井で行われた陸軍特別大演習の際に来福された昭和天皇のための天覧昆虫標

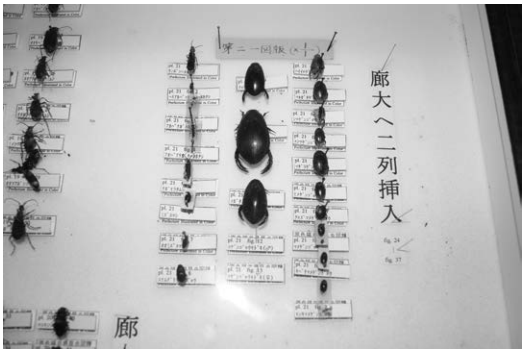

図4. 天覧標本の一部．福井大学教育地域科学部の前身である福井師範学校に保管されていた．昭和天皇が天覧されたということで，戦争中は空襲の際には最優先で避難させるよう指示されていたという．残念ながらシャープゲンゴロウモドキの標本は後年複製されたデータラベルが残るのみで，実物は失われている．

本である（図 4）．昭和天皇が屈指の生物好きであらせられたことは周知のとおり．福井県は昭和天皇の天覧を仰ぐため，昆虫標本を徹底的に収集するよう県内小学校および中等学校の児童に総動員を下した．指導のために講師をわざわざ京都帝国大学から招いたほか，標本に付けるラベルの形式まで細かく指示するほどの熱の入れようだった．採集の時期が 7 月に限定されたため，この時の収集標本でもって当時の県内の昆虫相の全貌が明らかになったとは言い難い．しかし，動員された児童は小中学校合わせ，のべ 64,874 人で，製作された標本数は 75,203 頭に達したという（福井県 , 1935）．まさに大日本帝国という時代がなせた一大事業としかいいようがないが，おかげで戦前の昆虫相を知るうえで重要なデータを後世に残すこととなった．この事業で収集された莫大な標本を冊子としてまとめたのが,「福井県生物目録」（福井県 , 1933）と「原色福井県昆虫図譜」（行幸紀念福井県博物学会編 , 1938）である．

これらの資料からは，オオミズスマシやミズスマシ，コオナガミズスマシといった種が，かつての福井市およびその近隣地域で普通種だったことがうかがえる．シャープゲンゴロウモドキ（当時名：コゲンゴロウモドキ）が福井市を含め，県内各地に分布していたことにも驚きを禁じ得ない．他都道府県の事例と同様，現在福井県でも水生甲虫類の衰亡が著しいが，とくにミズスマシ類は深刻だ．感覚的な物言いで申し訳ないが，ミズスマシはゲンゴロウやガムシ以上に危機的状況にあるように思える．平成 25 年度に福井県版レッドリストの改定事業が始まったが，少なからぬ水生甲虫類を新たにリストに挙げることは避けえないだろう．現在の旧福井城の濠はブルーギルとミドリガメ，江戸時代から残る芝原用水はタイワンシジミと，市内の水環境はあらかた外来種に占有されてしまったが，グリフィスの時代の同エリアの水生甲虫類の多様性はずいぶんと豊かだったに違いない．

最後に，「蛍の求婚者」に登場する，海原に泳ぎいって魚の鱗を奪取したシデムシについて考えてみたい．グリフィスはシデムシに対して，物語中でわざわざ括弧付きで “the ugly lover”（＝醜い求婚者）と悪口めいた表現を書いている．グリフィスにシデムシに対する嫌悪感があったと解釈することも可能だ．

それにしても海岸林はともかく，海にシデムシとはおかしくないだろうか．実は，グリフィスが越前海岸で見た（かもしれない）シデムシとは海浜性のヒョウタンゴミムシ類ではなかろうか？

昭和 8 年の陸軍特別大演習の際に作成された昆虫リストは，この時の昆虫採集が海浜環境でも行われていたことを示している．だが，近年の福井県の昆虫目録（福井県自然環境保全調査研究会昆虫部会編 , 1985, 1998）でも，前述の戦前の目録でも，福井県から日本のヒョウタンゴミムシの最大種オオヒョウタンゴミムシが記録されたことはない．一方，お隣の石川県からは本種の記録がある（石川むしの会・百万石蝶談会編 , 1998）．「蛍の求婚者」に登場するシデムシとは実はオオヒョウタンゴミムシのことで，本種は明治初期には福井でも見られたのでないか・・・・．ここまで来ると，もはや推測というよりは空想の産物にすぎないので，これ以上はやめておこう．

化学教師であるグリフィスがお伽話で描いた日本の甲虫たち．物語からは，彼が日本の甲虫を眺めつつも，日本人とはいささか異なる感性を抱いたことがうかがえる．「蛍の求婚者」「脚長家の大名行列」は，比較昆虫文化論を語るうえで理科系お雇い外国人が残した貴重な足跡なのである．

引用文献

荒俣　宏 , 1991. 世界大博物図鑑 . 第 1 巻 . 蟲類 . 平凡社 . 569 pp.
浅井　清 , 1989. グリフィス文庫の位相 . —W. E. グリフィスと明治日本 —. お茶の水大学人文科学紀要 , 43: 67–81.
枝　重夫 , 2013. 有名作家三人が書いたトンボたち . 昆虫と自然 , 48 (13): 20–23.
エリック・ローラン , 1999. なぜ日本の女性は虫が嫌いか . 文化人類学的視点から . ヒトと動物の関係学会誌 , 4: 88–93.
福井大学グリフィス来福 140 年記念事業編纂委員会 , 2013. W. E. グリフィス来福 140 年記念事業報告書 . 国立大学法人福井大学総合図書館 . 111 pp.
福井県 , 1933. 福井県生物目録 . 福井県 . 205 pp.
福井県 , 1935. 昭和八年陸軍特別大演習竝地方行幸福井県記

録 . 福井県 . 812 pp.
福井県自然環境保全調査研究会昆虫部会編 , 1985. 福井県昆虫目録 . 福井県 . 404 pp.
福井県自然環境保全調査研究会昆虫部会編 , 1998. 福井県昆虫目録（第２版）. 福井県県民生活部自然保護課 . 556 pp.
Griffis, W. E., 1880. Japanese Fairy World: Stories from the Wonder-lore of Japan. James H. Barhyte, New York. 304 pp.
Griffis, W. E., 1894. The Mikado's Empire（ 皇 國 ）. seventh edition. Harper & Brothers, Franklin Square, New York. 661 pp. [ちなみに「皇國」というのは，後世の日本人が付けた訳名ではなく，原著の背表紙に漢字で書かれている．]
Griffis, W. E., 1923. Japanese Fairy Tales. George G. Harrap & Co., LTD, London. 219 pp.
グリフィス著・山下英一訳 , 1984. 明治日本体験記 . 平凡社 . 343 pp.
行幸紀念福井県博物学会編 , 1938. 原色福井県昆虫図譜 . 行幸紀念福井県博物学会 . 72 図版＋索引 42 pp.
池庄司敏明・山下興亜・櫻井宏紀・山元大輔．正野敏夫 , 1986. 昆虫生理・生化学 . 朝倉書店 . 262 pp.
井崎市左衛門編 , 1932. 福井県の昆虫 . 70 pp.（非売品）
石川むしの会・百万石蝶談会編 , 1998. 石川県の昆虫 . 石川県環境安全部自然保護課 . 537 pp.
Johnson, P. J., 2002. 58. Family Elateridae Leach, 1815. pp. 160–173. Arnett, R. H. Jr., M. C. Thomas, P. E. Skelley, & J. H. Frank (eds.). American beetles, vol. 2. CRC Press, Boca Raton. 861 pp.
河合千秋編 , 1936. 福井県の伝説 . 郷土研究部 . 640 pp.
蔵原三雪 , 1994. W. E. グリフィスの明新館における教育活動 . 武蔵丘短期大学紀要 , (2): 1–12.
蔵原三雪 , 1995. 明新館における W. E. グリフィスの化学授業 . 武蔵丘短期大学紀要 , 3: 1–10.
蔵原三雪 , 2000. W. E. Griffis の理化学教養の形成 . ― ラトガース大学科学教育の展開を通して― . 科学史研究 , 39: 144–153.
岩下　均 , 2002. 古典文学における日本人の蛙観 . 目白大学人間社会学部紀要 , (2): 11–26.
沖　久也 , 1996. グリフィスの福井における化学教育 . 化学の教育 , 44: 24–25.
Preston-Mafham, Ken, 2012. World of animals. Vol. 25. Insects and other invertebrates. Brown Bear Book LTD, London. 128 pp.
佐々木忠次郎先生伝記編纂会 , 1940. 佐々木忠次郎博士 . 377 pp.（非売品）
杉原丈夫編 , 1970. 越前若狭の伝説 . 松見文庫 . 838 pp.
高田兼太 , 2011. 甲虫と人類の文化 ― ホタル科の文化昆虫学概説 . さやばねニューシリーズ , (2): 25–31.
高橋是清 , 1936. 高橋是清自伝 . 千倉書房 . 806 pp.
山下英一 , 2003. グリフィスの福井からの手紙 . 若越郷土研究 , 48 (1): 30–40.
山下英一 , 2006. グリフィスの福井民話 . 若越郷土研究 , 51 (1): 6–17.
山下英一 , 2009. グリフィスの日本昔話 . 若越郷土研究 , 53 (2): 1–12.
山下英一 , 2012. グリフィス福井日記・書簡に見る廃藩について . 若越郷土研究 , 56 (2): 25–35.
山下英一 , 2013. グリフィスと福井（増補改訂版）. エクシート . 362 pp.

（2013 年 12 月 10 日受領，2014 年 2 月 9 日受理）

【短報】伊豆諸島三宅島におけるクシヒゲチャイロコメツキダマシの記録

クシヒゲチャイロコメツキダマシ *Hodocerus malaisiensis* Bonvouloir, 1872 は，シンガポールおよびマレー半島より得られた個体に基づいて命名記載された種で，これまでに，日本，台湾，インドシナ半島，マレー諸島に広く分布することが知られている．日本国内では九州，伊豆諸島，黒島，屋久島，琉球の分布が知られているが，採集例は少ない（久松 , 1985; 鈴木 , 2007）．筆者は，三宅島で採集された本種を複数個体検することができたので，ここに記録しておきたい．

1♀, 東京都三宅島大路池 , 21-22. VII. 2010，高桑正敏採集；1♂1♀, 東京都三宅島大路池～坪田 , 14. VII. 2013, 藤田宏採集（図 1）．

伊豆諸島における本種の分布については，伊豆諸島全体をあげた例はあるが（久松 , 1985)，データを伴った記録はこれまでにない．梅谷 (1955) は，三宅島の採集記の中で「コメツキダマシの一種」を図示しているが，その特徴から判断して本種ではないかと考えられている（鈴木 , 2009).

本種は，日本に生息するコメツキダマシの中では，ヒゲナガチャイロコメツキダマシ *Serrifornax tumidicollis* (Redtenbacher, 1867) に似るが，触角は第 4 節より雄では強く，雌では弱く櫛歯状となることや，上翅末端が尖らないなどの特徴により識別することができる（久松 , 1985).

図1. 三宅島産クシヒゲチャイロコメツキダマシの♂.

今回の本種の記録により，伊豆諸島三宅島で生息が確認されたコメツキダマシの種数は，10 種となり，日本の離島で現時点で明らかにされている種数の中では，屋久島，対馬に続く数字となった．

記録をするにあたり，貴重な標本をご提供くださった，高桑正敏博士ならびに藤田宏氏に厚くお礼申し上げる．

引用文献

久松定成 , 1985．コメツキダマシ科．黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著，原色日本甲虫図鑑 (III): 42–51 (pls. 8–9). 保育社，大阪．
鈴木　亙 , 2007．鹿児島県大隅半島におけるクシヒゲチャイロコメツキダマシの採集例．甲虫ニュース , (160): 11.
鈴木　亙 , 2009. FIT により採集された伊豆諸島三宅島のコメツキダマシ . 甲虫ニュース，(168): 17–18.
梅谷献二 , 1955．伊豆諸島昆虫風土記２～三宅島の記～．新昆虫 ,(8): 14–19.

（鈴木　亙　法政大学第二高等学校生物科）